

はじめに

それは 1849 年のことでした。カリフォルニア街道、ここは、広大なヤマヨモギの生えた、炭酸ソーダや炭酸カリなどのアルカリ土壤に覆われた砂漠を横切ったネバダの場所です。東部から新しく開かれたカリフォルニアの金鉱へ好運をめぐらして先を急ぐ群衆にとっては、この無愛想な一筋以上に危険と思われる場所は、彼らの辿る道には何もありませんでした。殆ど水が無いばかりでなく、その不毛の土地は“狂暴な野蛮人”一馬を保有していない北部パイユート族、バノック族、そして、西部のショショーネ族の部族、で溢れていました。白人たちは、彼らを、勇気のある、馬にまたがり、バッファローの狩をしている大平原の部族と比較し、否定的に見ており、彼らが 1 万年の長きにわたり厳しい大盆地の中で生きていくために、杖を使い草木の根をほじくりまわっていたので、彼らを“ほじくり者”、と無礼にも見なしていた。

旅人たちの日記や、情報誌、そして、手紙—こうしたものは、こうしたインディアン達について白人たちが知ることとなったものの重要な情報源として、数世代にわたり、活躍してきたもの—こうしたものの中で、その著述者たちは、彼らを、日のある間は姿を隠し、そして、暗くなると砂漠の植物の間から出てきて、街道沿いの移住者たちのキャンプの中にこそそと入り込み、彼らの食料や所持品を盗むような者達で、“哀れな、品格の無い、そして、卑しむべき”、“最も生きていく価値の無いインディアン達”と表現していた。夜になると、恐怖を感じ、旅に疲れた白人たちは、どんなカサカサと動くものにも、また、暗闇の中の些細な音にも気を使い、守りを固めなければならなかった。彼らは、怪しい音を聞いたときには、その音のする方向に発砲し、生き物が倒れたところには、よく、死んだインディアンが横たわっているのを見つけた。時には、それが、子供であったり、女だったり、あるいは、ねじれた老人だったりし、旅人たちのそうした話が、全ての“ほじくり族”の者は、彼らの年や性別に関係なく、こそ泥である証拠だとして、知れ渡っていた。

この時期に起こっていたことについてのインディアン達の理解は全く異なっていた。後に生き残った人達、非常に明確に言う Salah Winemucca、彼女は、オレゴン街道に沿った地域に家族と一緒に住み、当時は、5 歳くらいのパイユート族の者であるが、彼女が夜のこうした発砲事件について、異なった見方をした、強烈、かつ、恐ろしい記憶を思い出させているけれども、こうしたことは、決して、歴史の本には記述されたことが無かった。

白人たちが信じていたことは、“こそこそとした”盗人であり、暗がりて人を殺したりする者は、事実、白人たちが、何世代にもわたり食料を集め、そして、儀式をして生活して来た土地を無意識のうちに直接踏みこみじっているその街道を無事に通ろうとしてきた家族には、空腹の恐ろしいインディアン達であった。この二重構造をした道路が、インディアン達をあたかもウサギかのごとくむやみやたらに射撃する事の好きな白人たちの流れのどう仕様もない恐怖の中で生活するようになり、自分達の領地のなかを自由に動き回るインディアンの自由を損なっていた。

彼らの領域のある場所から別の場所へと、彼らのそばを通り抜けようと、彼らの親族のところに行くために、あるいは、破れかぶれになり必要とされた野生の食料の手に入るところに行こうと、インディアンの父親や母親は、自分達の子供と一緒に必死になって、昼の間は、サルビアの木立のなかや、砂漠の藪のなかに隠れ、夜になると、白人たちのキャンプを通っている道を横切り、若者達の居るほうに音を立てずにあわてて駆けて行き、すべての年寄りたちが、一人ずつ、渡り終わるまでそこに隠れていた。

もし、白人たちが彼らの生活用品に注意を払わないときには、勇敢なインディアンの若いものの誰か、彼らは、普通、彼らの食料を調達する場所に侵略してきてこれを破壊したり、彼らの水源地を汚した



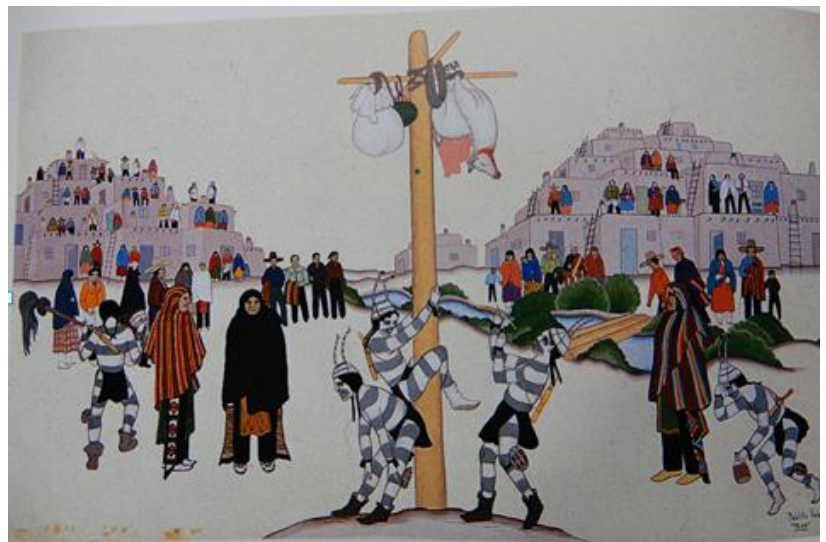
Blackbear Bosin (kiowa-Comanche) による大草原の野焼き 約 1953 年

“我々は、みんな、我々の祖先の手段と、習慣と、態度と、そして、信条をできるだけ正確に表現するときには、我々の人々、そして、芸術の世界に対して責任をもって行動してきた” — BLACKBEAR BOSIN

りする侵入者たちを咎めていたが、その彼らは、移住者たち牛の一头や二頭をとるのに協力することを悪い事とは思わなかった—インディアンは、それを相互依存の許容された行動だと理解していたように。端的に言えば、こうしたことは、旅行者達が、“生きている価値の無いインディアン達”として起こしたことであり、とは言いながらも、一生き残ろうとしている、男、女、そして、子供たちを、白人たちは、彼らの動きを夜に聞き、そして、殺していたのだ。

原住民アメリカ人の歴史の中で、

カリフォルニア街道が特種だというわけではない。かつて 1492 年に西ハンプシャーにヨーロッパ人が到着して以来、彼らのインディアンとの関係は—今日でさえも— 数えきれないほどの同様の話の汚点、その中で 根拠の無い恐怖、偏見、そして、誤解が悲劇に導いてきたのであるが、そうした物が、記録されてきた。



Koshares of Taos by Pablita Velarde

(Santa Clara), ca. 1947

数年がたち、信用と調和を築こうという崇高な目標と最も素晴らしい意図を持った人達や集団が、両方の側に、存在するようになった。しかし、彼らは決して十分な数ではなかったし、それだけの力もなく、あるいは、歴史的な広がりや相互関係の中にある長いあいだの忍耐的な溝を凌駕するほどのものでもなく、その始まりは、“新しい世界”の“野蛮で処女的な不毛の地”としてヨーロッパ人が理解した、コロンブスが最初に到着した時まで遡る。勿論、インディアン達にとってこの“新しい世界”は、まさしく人々の、かつ。無数に高度に複雑な、繁栄した文化と文明の何百万年もまえのものであった。

大部分は、基本的な問題はインディアンではないヨーロッパ中心の考えから発生した。(今もなお発生している)それは、ヨーロッパからの最初にアメリカ人となった人々の一部に根深く沁みこんでいた信念、これは、彼らのアメリカ人としての子孫によるものと同じように持っていた信念であるが、彼らの文化、価値観、宗教、生活様式、能力、そして、達成したものは、インディアン達のそうしたものより、もっと進んだものであり、そして、もっと序列の高いものであるという考え方であった。したがって、それは、彼らが、インディアン達が劣っていると思うことに繋がって行った—彼らは、文明化されていない石器時代の生き残りで、多分、類人的な存在で—そして、彼らの文化は、文明化された人類にとっては何の役にも立たない、野蛮で、そして、危険なものとなってきた。

何世紀にも渡り、もっと重要なことは、彼ら自身の優越性のなかの信仰が、白人の侵略者たちに、インディアンの奴隷化を正当化したことであり、彼らの土地や、資源の源となる土地を略奪することを、彼らの社会を破壊することを、反インディアン的な先入観を植えつけること、そして、今尚、インディアン達を劣等な人達として扱ったり、彼らの民族自決や、統治権、そして、彼らの精神的な生き方を尊厳するという考え方の否定を正当化してきた。

事実、1492年に二つの全体的に異なる、しかし、豊かさの世界をかきたてるもので、それらはいずれも、それ自身の顕著な伝統と宇宙感を持ったものであるが、複雑な社会と、進化した文化が衝突した。我々は、しっかりと思い出させられる必要があるが、ヨーロッパ人たちは、初期の近東の文化とエジプト、ギリシャ、そして、ローマの遺産：ユダヤ教的・キリスト教的な倫理感と 宗教的な教え；沢山の競合する地域、国々、そして、ヨーロッパの東部、西部に存在した帝国の政治的、勝つ知的な生命；そして、封建制度と、拡大する資本主義の経済的な制度の継承者たちだったのだ。この遺産の全てのものは、インディアン達、彼らの独自の長い間、そして、畏敬心を起こさせる受け継いできたものは、白人にとっては全く無関係のものであり、また、共有されたものではない、そんな彼らにとっては、相入れないものであり、全く知らないものであった。それらのある部分はアジアで形成されたものであり、そして、

数千年も古いものであった；そして、それ以外のものは、異なるアメリカの環境の中で、1,000 世代にも及ぶ生活をしている間にインディアン達により構築された多様性のある社会と精神的なシステムを持った目を見張るような文化と文明の、コロンブスが到来する以前にあったものの所産であった。彼らが白人たちに遭遇した時、彼らの視野には、少なくとも、彼らは対等であるという行動をした。予期もせず、そして、役立つようにすべての部族を打ちのめしたことで、それは、ふんだんに火器、猛々しい馬、攻撃犬、鉄製の剣、そして、毒気に満ちたヨーロッパ人の病気などを携えたヨーロッパからの攻撃的な侵略者からは一般的に無視された見方であった。カリブ海諸国、ならびに、北アメリカの南部地域に住んでいるインディアン達に対して、スペイン人により持ち込まれた、全く恥知らずの人種優越感が他のヨーロッパ人の力により別の形で持ち込まれ、そして、大陸全体に蔓延して行き、どこでも傷害を与え、そして、敵意をい



by Peter H. Shelton, Jr (Hopi)

だかせるような、どんな形であれ、その機会が、調和的に共存し、そして、ヨーロッパ人と生まれながらの人々との間の相互の尊敬と理解しあうその間にあったのかもしれない。

白人たちの間には、千年もの期間に築かれてきたインディアン達の世界に対して、ヨーロッパ人の与える傷害的な衝撃をしっかりと見る目が殆ど無かった。

お互いに接触する数世紀の間、インディアン達がそれらに対して何の免疫も持っていなかった天然痘の大流行、のう虫、そして、その他の病気、これに加えヨーロッパ人の食欲さ、改革的なことに対する熱中心、そして、強力な武力の力の利用、こうしたものが、生まれながらの人々と文化に対しては破壊的なものであった。原住民の人口は、壊滅的なものであった；インディアン達の集落や部落は破壊され、そして、小集団と化して行き；宗教的な出来事は、純粋さを損なわれ、そして、むしりとられ；統治的、ならびに、社会的な指導者たちは殺され；連盟や、酋長達の支配する地域、そして、その他の社会は、ばらばらに解体され；そして、誤って指導され、リーダーの居ない生き残りの人達は奴隷化されたり、あるいは、無理やりに他の集団に避難させられ、そして、一緒に移動させられた—あるいは、彼らの多くの人がそうしたように、生きるだけがやっとなような狩猟をしたり、あるいは、彼らの世界の崩壊の始まりの中で再び野生の食料を捜し求めるような原始的な生活に戻された。

17 世紀までに、北、ならびに、南アメリカの 50 百万人以上の原住民が、戦争、病気、奴隷化、そして、ヨーロッパ人の意に帰さない、あるいは、意図的な残虐行為により亡くなった—歴史上、群を抜いた大虐殺、このように多くの人口学者たちにより推察されている。

コロンブス以前の世界が消失すると、ヨーロッパ中心の考え方の火が燃え上がり、今も、記録から、その世界の歴史、文化、そして、出来上がったものを消し去ろうとしている。ユカタンでは、スペイン人が、こうしたインディアンをキリスト教徒に改宗させようと懸命になった結果、殆どあらゆる本という本を焼却したり、あるいは、破壊した。その炎の中で、子孫は、つい最近まで、マヤの人達の輝かしいコロンブス以前の文明の真の歴史、意味を明らかにするようなマヤ文明の象形文字を読む能力を失ってしまった。

ニューイングランドでは、マサチューセッツ湾のピューリタンが強力なピクォート族を“スペインの子供たち”と見るようになってから、彼らは、放火や殺戮で、こうしたインディアン達がそれまでに持っていたあらゆる形跡を消し去ろうとした。1637 年に彼らは、聖戦と称して、数百名のピクォート族を虐殺し、殆ど生き残ったものは居ないけれども、極僅かの人を何の益もないような形で、やがてはピクォート族が絶えてしまうような形で他部族に小分けし分散した。両方の大陸にまたがり、ほんの僅かのヨーロッパ人が、彼らが破壊しつつあった“不思議な”社会の記録を後々の世代に伝えることがしがいのあることだと考えた。

合衆国のような新しい国が植民地的な力を継続することができたように、白人たちの、インディアン達は、彼らのインディアンであることを白人たちの水準に上げるか、あるいは、消え去るしかない、そのどちらかに運命付けられた未開人なのだという思い込みに何の変化も無かった。殆どの 19 世紀を通して、相互の意思疎通、ならびに、理解のギャップは着実にますます深いものになって行っただけでも、インディアン達を略奪してきた白人たちの後にやって来た、辺境の地の人達は、インディアン達を“退去させたり”あるいは、強制的に白人たちの生活スタイルに変えさせたりする、それ以外には死を与えることにより排除することを望んでいた。Andrew Jackson は、インディアン達を狼と結びつけ、そして、Philip Sheridan 将軍は、いいインディアンだけは、死んだ者だと皮肉っていた。インディアンでない殆どのアメリカ人は、この 2 人と同じ考えを持っていた。

合衆国の東部、ここから、インディアン達は発生した、もしくは、ある地域では、そこでは、かれらは、恐怖



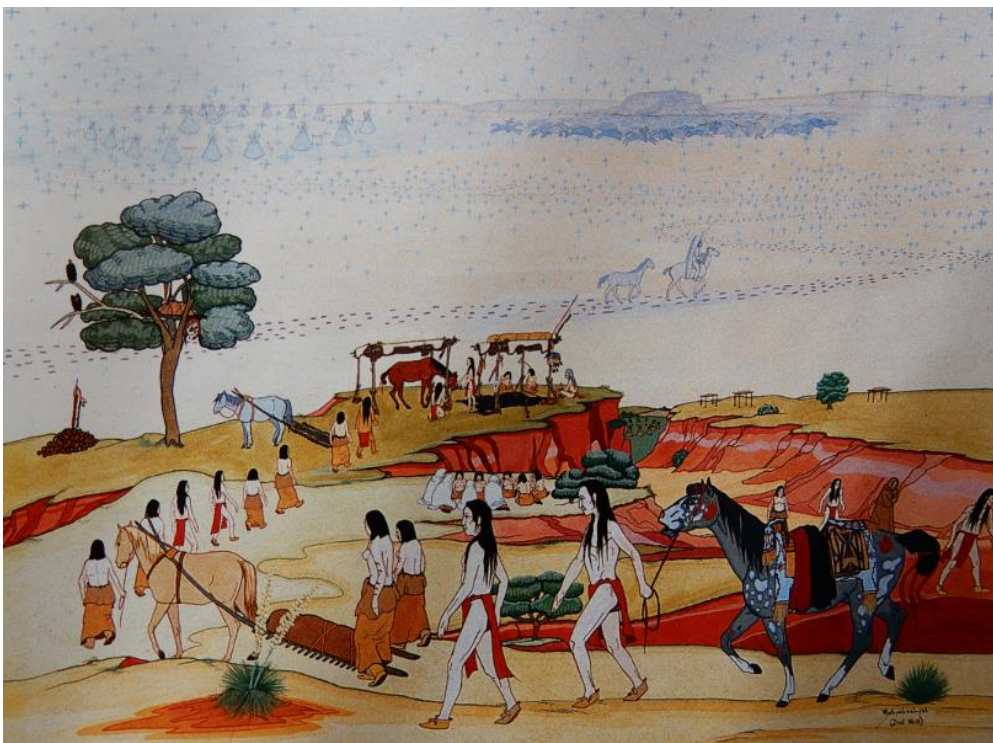
Waiting Dancers (detail)

By Arthur Amiotte
(Oglala Lakita), 1978

を新しいインディアンではない社会に組み込むのにはもはや十分とは言えないようなところであるが、ここには、インディアン達を理解し、彼らを高く評価するということに対する征服者的なヨーロッパ中心主義の失敗の必然的な成り行きの結果があった。これらの領域では、インディアンではない人達、彼らは今は安全であるが、インディアン達を“高貴な未開人”と見なして、郷愁の気持ちとロマンチックな思いで、彼らを振り返ってみることを始めた。しかしながら、こうしたロマンチックな考え方の慈悲深い人達は インディアン達のことについては、殆ど何も知らない人達ばかりであり、彼らが知っていることは、殆どがゆがめられたものであるか、あるいは、なおもインディアン達は、実に“野蛮であり、発達していない”そして、残念ながらそのほうに進まなければならない人達であったという確信で導かれているような、完全に間違った知識でしかない。

インディアン達の抵抗する力が最終的に打ち砕かれた後、人種的な優先説は、19世紀の終わりに向けて、よりひどいものではなくなったけれども、無くなったというわけではなかった。恩着せがましいこと、威張らないこと、強制的な同化の政策ーインディアン達を踏み消して根絶させるための断固とした試みーこうしたものが、20世紀の初頭の時期まで続いた。そして、全てのものは、白人アメリカ人たちの根深い先入主観、自分達が優越であるという示威行動であり、そして、インディアン達の世界は、保存する価値も、あるいは、そのことに対して知る価値も無いという思い込みだった。

その恐ろしい期間の間、合衆国のインディアン達の人口は、常に大体 250,000 人以下で、原住民アメリカ人の間の士気は、どん底状態だった。現在では、囚人たちよりもちょっとだけましのような保護居留区で生活し、そして、亡くなって行く、真の消えうせて行くアメリカ人であるインディアン達は、大体の白人たちに対しては、比べものにならないほどで、とてもひどい状態であった。信仰の自由を否定され、彼ら自身を統治し、そして、自分達の出来事を管理する権利を奪われ、そして、禁止と抑圧のあらゆる手段により、文字通り彼らからもみ消されたインディアンであるという意識を持つことを否定され、彼らは、白人たちとの最低限の接触を経験した。後者の者は、彼らを捕逃がすことは無かった；もし彼らが、インディアン達のことをたとえ考えたにしても、彼らの考えは、“酒に溺れたインディアン達、”“怠惰なインディアン、”“我々の残り者のような税金を支払わないインディアン達”と言った浅ましい感覚の、生まれつき引き継いできたような新しい典型的な考え方の、優越感の塊により支配され、そして、色付けされたものだっただろう。



Death and the New Life
W. Richard West (Cheyenne)

急速に速度をあけて進められた同化政策と、インディアン達の間での文化変容、そして、インディアンー20世紀の最終段階での合衆国のなかの白人の親戚の者の中での、急速な、かつ、基本的な変化（この本の第五部の中で、Philip Deloria が記述している）、非インディアンの歴史、先入観、そして、ヨーロッパ中心主義から来る結果としての差別、こうしたものが、今もなお、膨大な数のインディアンではない人達の間に見られる。

日々、こうした感覚が、沢山の形式を取り続け、そして、平等の機会と認識のためインディアン達の奮闘を徐々に衰えさせ続けている。力のある、経験者でもあり、そして Wounded Knee 以来、丸々100年の間、アイダホの弁護士長官のところに駆け込んでいる尊敬されたインディアンは、白人の友人に次のように話された。“私達は、貴方は最高の人物だ、そして、素晴らしい任務を果すだろうとおもっているが、でも、私達は、我々の国の法的な出来事をインディアンの手に渡すようなことに投票することは出来ない。”と。この言葉の正直さに感動してはいるけれども、その一方、もし、それが感情的なものでないならば、インディアン達は、相変わらず、事務所を訪れ続けただろうーそして、勝利したかも知れない。しかし、主だった都市では、得意げに膨大な数のインディアンの展示物を持っている名だたる国立の歴史博物館の理事達は、部分的に“インディアン達は、この博物館での出来事をどのように扱えばよいのかを何も知らない子供のようなものである。”との理由で彼らの評議会にインディアン達を受け入れることに躊躇している。評議会は全て白人たちで占められているのだ。

接触と、そして、相互関係の歴史の5世紀が過ぎた現在、殆どの非インディアンのアメリカ人に対し、インディアン達は親愛なるよそ者でありー実に最初のアメリカ人ではあるが、しかし、反語的には、全てのアメリカ人の人口の中では、正直、最も知られていない人であると言うことができるといっても過言ではない。ヨーロッパ中心主義がその任務を果たした：遺産を背景にし、そして、神話を裏づけにして、未だ、非インディアンの人達は真実を殆ど知っていない。

と同時に、白人たちの間違っただ、そして、陳腐な考えが、インディアン達に対してばかりではなく、彼らを征服し、そして、略奪して来た人達に対しても、非常に大きな傷害を与えてきたということが、多くの人達にはっきりとして来た。インディアン達の見方から、そうした傷害は、彼らの部族の人々が取返しのでないほど大量に失われたことと言うばかりではなく、非インディアンの人達の間での相変わらずの無知と誤解の中に残っている。インディアン達を余りにも否定し続けたアメリカ人たちは、対立するような不正義と、アメリカ社会の中で彼らに相応しい立場を勝ち取ることを支持している。一方、白人たちは、インディアン達の歴史や文化を否定することにより、それらの背景をアメリカの大地、膨大な豊さ、そして、インディアンの精神的な、かつ、創造的な生活とともにある学習と経験の何千年という時代に向けてしまった。現代のインディアンの画家、著作者、音楽家、詩人、劇作家、踊り手、宝石細工師、彫刻家、そして、その他の創造的な仕事をしている人達の目を、漁場や森林、そして、砂漠さえも上手に管理しているところに見られるインディアン達の知恵・知識の特異性に向けさせたインディアン達の神話や物語の膨大な伝説から、大宇宙は、現代の世界のために学習することに溢れている。アメリカの歴史をインディアンの歴史で満たすことなしに、そして、正常な適用なしに知ることを主張する人は誰も居ない。

この全て、そして、それ以上のものがこの本の基礎をなす主題であり、西半球において彼らの祖先の存在が知られた最も古い時代から、今日までの20千年にもわたる北アメリカの原住民の駆り立てる歴史なのである。五人の著者たち、彼らは夫々が全て、彼らが担当している主題における専門家であり、学者として認められた人



Noble Indian

by Fritz Scholder (Luisefio), 1973

達で、彼らは、ぎっしり詰まったインディアンのお話を正確に、そして、納得のいくように、そして、インディアンのお考え方から一重要性があるように、一説明している。本の目標は簡素であること：もし、終わらないのであれば、あれほどインディアン一白人の関係を苦しめてきた誤解と間違った捕え方の相互疎通の溝を埋めるための橋わたしを助けることである。

この本で、考察の終わりに責任を負わされなければならないものは、とりわけ最近の技術における発展に対する証であり、そして、学際的な企業に対する証である。考古学者、人類学者、遺伝学者、自然科学者、民族歴史学者、地質学者、微生物学者、植物学者、動物学者、言語学研究者、そして、その他の、コンピューターから最新宇宙科学の人工衛星を思い描く領域に至るまでの多くの異なった研究領域における科学者たちが、過去を明らかにし、そして、その謎を解き明かす中で偉大な飛躍を遂げた。と同時に、インディアン達は、その他の世界で彼ら独自の遺産や文化の謎を解き明かすことや、彼ら独自の歴史を相関づけることで、かつて無いほど強く自分達を主張することで大きな役割を演じてきた。非インディアンの学者たち、現代の原住民アメリカ人の著述者たち、芸術家、科学者、教師たち、伝統を保存している人達、そして、部族の持つ文化の指導者達、そうした彼らが、自分達自身のことについても把握できていない、白人たちの、インディアンの物語を語ることに對するもっとずっとおおきな客観的な妥当性と真実の全体を提供することも理解していない多くのものを、知られるようにし、そして、理解し易いものにして、インディアン達の過去の展望を輝かしいものにするために、しばしば協力し、尽力して来た。



Making Wild Rice by Patrick DesJarlait (Chippewa), 1946

こうした発展の結果が、この本のいたるところで、そして、教科書や説明の中に反映されている。多くの殆どの読者にとって、あたらしい情報があり、そして、沢山の新しい展望と、胸をわくわくさせるような驚きがあるだろう。専門の研修者でさえも、一般の読者のための仕事のなかで過去に出版されなかったような、しかし、いまなお研究が続き、そして、専門家の間や専門学術誌の中で議論されているものとかの視点も含め、新鮮で、興味のある沢山のものを見出すことだろう。

たとえば、David Hurst Thomas の第一部で、読者は、古代マヤ文明、これは、彼らの絵文字のコードが 1960 年台の後半に消失し、大飛躍とほかの技術が彼らの膨大な土地改良の仕事や要塞の技術の謎を解いたばかりでな

く、それ以前の北東の森林地帯に住んでいたインディアン達との接触によりトウモロコシ以外の農業の独自の開発の思いもかけない発見などもあった；ホープウェル文化やミシシッピー族の盛り土の丘に築かれた社会；そして、コロンブス以前の南東地域における **Chacoans** 族のトルコ石を基本とした経済と道路システムなどである。

最も重要なほどに、おそらく、この本は、原住民アメリカ人を本物―彼らが誰であるのか、誰であったのか、彼らはどのような人だったのか、どのように生活していたのか、彼らの目的、彼らの苦闘、彼らの人間性、そして、個性、そういったものに導いてくれる。例えば、第二部では、**Jay Miller** が我々を、彼らのコロンブス以前の世界観がヨーロッパ人たちの猛襲、そして、白人たちの新しく、そして、恐ろしい病気のもと、崩壊したとして、インディアン達の世界の内側へと行かせている。物語を 18 世紀に進めながら、**Richard Whites** の第三部は、原住民アメリカ人たちがどのようにして、彼らの世界を元のものと同じようなものにしようとしたか（しかし、究極的には失敗したが、）、そして、新しい部族、しきたり、そして、価値観が、失われたしまったすべてのもの、こうしたものはいつの時代にも存在していたと、やがては、白人たちが、考えるようになったものであるが、これらに置き代わるように現れてきた。19 世紀になり新しいアメリカ人たちが、最後の原住民アメリカ人たちの領地を荒廃した様に、最終的な打倒と粗野な取り扱いが、**Peter Nabokov** の第四部の主題である。第五部では **Pilip Deloria** の新鮮な、インディアン達のゆっくりとした、そして、苦悩をともなった公正と、そして。かつて彼らが保有していた主権と独自の制度を奪回する権利を求めた苦悩で記された 20 世紀の復興についての先見的な説明がなされている。

最後に、破壊しつつある固定観念と生き残っているインディアン達の視点で、この本は、**David Hurst Thomas** により引用された **California Chumash Indians** の講義の重要性を明確にしている。**Kore Kotah** は、“より良くも、より悪くもない、ただ、違いがあるだけだ”と言った。違いは、それが肌の色、生活の手段、あるいは、考え方がどうかということに配慮されなければならない。